高知県土佐清水市方言の音韻

― 四つ仮名の区別を中心に ―

川中子 善子

はじめに

四国四県の方言の中でも高知県方言は，四つ仮名の区別や前鼻音の存在をはじめとする多くの言語現象から，他の三県とは大きく異なることが指摘されている。それは南を太平洋に，北は四国山脈によってさえぎられているという地理的要因が大きな壁になったためと言われる。また，土佐の国にあって東西で言葉が異なることも古くから知られ，江戸時代には鹿持雅澄によって「幡多方言」が書かれている。西言葉とも称されるのが中村（現四万十市）を中心とする幡多方言である。この幡多方言は高知県方言の中で四つ仮名の区別の崩壊度が最も低い方言である。

さらに幡多方言は，特にアクセントで愛媛県宇和島市近辺と共に，早くから注目を浴び，高知市を中心とする京阪式アクセントと中村を中心とする東京式アクセントの接触地帯の研究は盛んになされてきた。また北幡多地区では，東京式アクセントのさらに変化した第二種のアクセント体系を持つことでも知られている。

本論は，その幡多地区の中でも交通の便が悪く今まであまり顧みられなかった四国最南端の土佐清水市方言の音韻の実態を明らかにするものである。足摺半島を中心とする地区には，古い四つ仮名の区別を有しながらも特異現象「ス」と「シュ」，「ツ」と「チュ」，「ズ」と「ジュ」，「ヅ」と「ヂュ」の混同があり，交通機関は専ら船であったことからも，孤立的な島の要素が言語上にうかがえる方言である。この特異な現象は土居重俊氏，浜田数義氏よる指摘があるが，体系的方言研究は行われていない。土佐清水市は私の出身地であり，本資料は旧東京都立大学大学院（現首都大学東京）に提出した修士論文「高知県幡多方言の音韻・アクセントの記述的研究」（旧姓和泉善子）のために，幡多地域９１名を面接調査したものを利用している。話者は，はえぬきの方で高年層はすべて明治・大正生まれである。その実態を述べ，方言の変化過程を探りたい。

１．土佐清水市清水・松尾・布の概要

土佐清水市は昭和２９年，中村（現四万十市）･宿毛と同時に市政を敷いた。市の経済は歴史的に漁業に依存するところが大きく交通も船便が主であり，それは昭和三十年まで続いている。昭和４７年足摺が国立公園になり，本格的に漁業と観光の市として発展したが，現在は漁業不振や観光客の減少で静かな町に戻っている。足摺岬には四国霊場三十八番札所金剛福寺がある。松尾は足摺岬の中心地区であり近くの中浜は幕末に活躍したジョン万次郎の出身地である。清水は土佐清水市の中心地であり，足摺半島の付け根にある。布は，足摺半島と相反する布岬の先端にある地区である。清水・松尾・布はそれぞれ港を持つ漁業を中心とする集落である。調査時の昭和５７年の人口は約２万５千人あまりであったが現在はさらに減少している。

２．話者及び調査方法と調査期間

話者は清水地区 10 名・松尾地区 18 名・布地区４名　合計 31 名

清水地区：	高年層	明治35年～40年生まれ6名	(男1名 女5名)
	中年層	昭和10年～12年生まれ2名	(女2名)
	若年層	昭和40年～42年生まれ2名	(女2名)
松尾地区：	高年層	明治33年～44年生まれ7名	(男2名 女5名)
		大正２年～12年生まれ4名	(女4名)
	中年層	昭和８年～19年生まれ4名	(女4名)
	若年層	昭和30年～45年生まれ3名	(女3名)
布地区：	高年層	明治31年～35年生まれ2名	(男1名 女1名)
		大正４年　1名	(女1名)
	若年層	昭和45年　1名	(女1名)

調査方法は，すべて調査表による面接調査である。読み書きが充分ではない話者も多く，絵カードやなぞなぞなども使用し複数回発話してもらった。音韻の体系調査を実施した期間は，昭和５７年・５８年である。

なお，修士論文は音声表記で述べた部分を，本論ではできるだけ分かり易く述べるため，カタカナ表記を音声表記の代わりとして使用する。

３．音韻対応

音韻体系の中から共通語と対応の見られるものを挙げる。音韻交替は用例の多いものを選び挙げることとする。

（１）母音

①／ｕ／　は，高知市方言が，唇の丸めと突き出しが観察される典型的な円唇の［u］なのに対し，土佐清水市方言はやや共通語などの非円唇に近い。唇の丸めには個人差がみられるが，幡多地域の中でも特に土佐清水の高年層に唇の丸めと突き出しの小さい話者が多い。しかし共通語にみられる完全な非円唇と比較すると唇のつぼみもみられ調音点も後よりであり，円唇と判断される。

②母音は無声化せずはっきりと発音される。連母音は融合しない。特に共通語をはじめ全国でみられる／ｅｉ　／の融合は見られない。警察（ケイサツ）・塀（ヘイ）・姪（メイ）・丁寧（テイネイ）などすべて，長音化エーにならずエイである。逆に，形容詞の語末の［i］は長音化することがあるが，高年層では一般に短呼化される。淋しいは（サミシ）となり［i］は脱落する。高年層の長音は１拍分より短く，長母音か短母音か区別がつきにくく，短呼化が目立つ。特に語末では長音が短音化されて発話されることが多い。

③／ｉ／と　／ｅ／の交替が目立つ。前掛けはマイカケ，二階はニカエ，黴はカベ，谷はタネ，箒はホーケ，鉛筆はエンペツ，教えるはオセル，唾はツバケ，虱はシラメ，大きなはオーケナになりやすい。

（２）（子音）

①四つ仮名「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」の区別が音韻上ある。「ジ」「ズ」の子音は摩擦音の／ｚ／であり，「ヂ」「ヅ」は破裂音／ｄ／から破擦音／dz／間の子音であり前鼻音も伴う。

②／ｇ／の前に鼻音を伴う。／ｇ／の語頭は,「ガス」「ガラス」「塵」「ゴム」など，母音が広母音の時鼻音が聞かれるが，個人差も大きい。語中語尾の／ｇ／はほぼ規則的に鼻音を伴って聞こえるが，特に鼻音化して強く現れるのは次の１４語である。顎がアンゴ，動くがインゴク，禿げハンゲ，髭ヒンゲ，河豚フング，午後ゴンゴ，鍵カンギ，家具カング，影カンゲ，籠カンゴ，釘クンギ，焦がすコンガス，凪ナンギ，葱ネンギとなるが，拍音素としての１拍分の長さはない。

③／ｂ／の前に鼻音を伴う。語頭で聞かれたのは，泥ンドロの１語であった。撥音として１拍を有していない。筆フンデは２拍，踏んでフンデは３拍である。語中語尾の／ｂ／はほぼ規則的に鼻音を伴って聞こえるが，特に鼻音化して強く現れるのは次の１３語である。間アインダ，井戸インド，宇治ウンヂ，腕ウンデ，枝エンダ，裸ハンダカ，藤フンヂ，札フンダ，筆フンデ，筏イカンダ，角カンド，筋スンヂ，喉ノンドが挙げられる。

④「ス」と「ジュ」の混同，「ツ」と「チュ」の混同，「ズ」と「ジュ」の混同，「ヅ」と「ヂュ」の混同がある。

（３）（音韻交替）

①／ｂ／と／ｐ／の有声無声音の混同が特に外来語において顕著である。／ｂ／から／ｐ／は，バナナはパナナ，バスはパスになる。／ｐ／から／ｂ／は，ポストはボスト，アパートはアバート，ポケットはボケット，エプロンはエブロンになりやすい。

②／ｈ／と／ｓ／の交替が見られる。下はヒタ，質･七はヒチ，七輪はヒチリン，明日はアヒタ，干したはホヒタ，落としたはオトヒタになる。そんな　ホンナ，それから　ホレカラ，そうかね　ホーカネになる。

③／ｍ／と／ｂ／の交替が見られる。気味はキビ，狭いはセバイ，紐はヒボ，俯くはウツブク，眠たいはネブタイ，傾くはカタブクになる。逆に，錆はサミ，鉄兜はテツカムトになる。

④／ｄ／と／ｚ／の混同がある。撫でるはナゼル，逆に，混ぜるはマデル，全部はデンブ，座敷はダシキ，造船所はドーセンショ，雑巾はドーキンになる。この現象は高年層よりも若年層によく起こる。

⑤／ｓ／と／ｚ／　の交替がみられる。短いはミシカイ，同じはオナシ，頁はペーシ，なぜ　ナセ，目覚まし　メサマシ，神社は　ジンシャ，逆に，砂はズナ，薄はスズキになる。

⑥／ｇ／と／ｋ／　の交替が見られる。脱ぐはヌク，逆に，蟹はガニ，案山子はカガシ，踵カガト，欠けるはカゲルになる。

⑦語頭に撥音ンが立つ。馬はンマ，梅はンメ，生むはンム，ンダ（おれの意），ンダラ（おれらの意）になる。語中に入る撥音がある。五合はゴンゴ，牛蒡はゴンボとなる。

⑧［awa］の場合は［w］が脱落し，長音化する。俵はターラ，瓦はカーラ，縄はナーになる。

⑨［ju］は，［i］になる用例が多い。指はイビ，小指はコイビ，床はイカ，冬はフイ，粥はカイ，歪むはイガム，眉はマイ，露はツイ，痒いはカイとなる。

４．「ス」と「シュ」,「ツ」と「チュ」,「ズ」と「ジュ」,「ヅ」と「ヂュ」の混同

「ス」と「シュ」の混同，「ツ」と「チュ」の混同，と「ズ」と「ジュ」の混同，「ヅ」と「ヂュ」の混同は，足摺半島中心の現象とされているが，足摺半島から離れている下川口や下ノ加江地区でも聞かれ，最も離れた交通不便な布岬でも起こっている現象である。これは現在の土佐清水

市が昭和２９年に５村町の合併により市となったが，明治以前から「以南」(「渭南」とも書く）地区としてのまとまりがあることを示している。土佐清水市に隣接する四万十市（旧中村市），幡多郡三原村，幡多郡大月町，宿毛市では，これらの現象は起こっていない。

明治･大正生まれの高年層は音韻的対立が無く，昭和３０年以降の若年層はこれらの現象は起こらない。中年層は音韻的対立はもつが，語彙的には混同が見られる。

（１）調査語彙

調査語彙は明治生まれの話者の使用語彙から選んでいる。

「す」（語頭）酢・巣・煤・炭・吸う・裾・少ない・酸い・すすき・鈴・雀・姿・西瓜・スケート・相撲・スキー・鮨・擂り鉢・砂・数字　（語中語尾）扇子・箪笥・ダンス・烏・ガス・刺す・茄子・バス・忘れる・出す・椅子・鶯・カレーライス・臼・薬・煤・襖・消す・押す・レース・コスモス・通す・かます（魚）

「しゅ」（語頭）朱・週番・修学旅行・祝言・習字・終電車・首位・習慣・集会・主人・宿題・手芸・手術・繻子・舅　（語中語尾）一週間・一周忌・運転手・満州・選手・九州・下宿・清酒・葡萄酒・喪主・戸主・拍手・パラシュート・亭主・民宿・刺繍・詩集・自習・空襲警報

「つ」（語頭）月・机・土筆・土・躑躅（植物）・角・椿（植物）・爪・鶴・机・注ぐ・妻・包む・月夜・使い・朔日・露草（植物）・堤・吊り橋・釣り・壺・筒　（語中語尾）八つ・パンツ・暑い・立つ・夏・松・鉛筆・狐・打つ・靴・鉄・熱い・バケツ・卒業・持つ・五つ・鰹・きつい・小包

「ちゅ」（語頭）チューインガム・チューリップ・チューブ・中華そば・中学校・注意・駐在所・駐車場・駐車・注文　（語中語尾）電柱・シチュー・夢中・宇宙・焼酎・女中・途中・懐中電気・アル酎・お中元

「ず」（語頭）狡い・随分・ズボン・ズロース（下着）・ずぼらな・ずらす・誦経　（語中語尾）鈴・涼しい・雀・硯・鼠・数・レンズ・柚・ビーズ・葛・葛餅・見ず知らず・脊髄・鈴虫

「じゅ」（語頭）柔道・十五夜・十姉妹（鳥）・塾・授業・寿命・巡査・十一・十三・十円・襦袢（下着）・数珠・十薬（植物）・熟し柿　（語中語尾）機関銃・三十五・算術・忍術・手術

「づ」（語頭）頭巾・図画・頭痛・頭陀袋・図鑑・づっしり・づつない（疲れたの意）（語中語尾）大豆・小豆・屑・屑籠・盃・地図・鼓・渦・綴り方・水・石鎚山・竹筒・続く・三日月・缶詰・福神漬・鬼灯（植物）・横綱・崩す・貧しい・削る・清水

「ぢゅ」（語頭）重傷・住所・住職・住宅・重箱・重役・重態　（語中語尾）饅頭・五重塔・居住・心中

（２）「ス」と「シュ」の混同

①高年層は次の語の対立がない。

a　巣・酢と朱

b　酢飯の酢と朱色の朱

c　数字と習字

d　煤と繻子

e　扇子と選手

「巣･酢」も「朱」も「ス」もしくは「シュ」の発話があり対立意識がない。また，音声は「ス」と「シュ」の中間的な子音も聞かれる。

②項目ａ～ｅの前の語を「ス」と発音すると後者も「ス」，前者を「シュ」と発音すると後者も「シュ」となりやすい。「煤」は「スス」「スシュ」「シュス」「シュシュ」の４通りの発音が聞かれるが，「スス」か「シュシュ」のどちらかになりやすい。

③「す」は拍数の多い語のほうが「シュ」になりやすい。個人差もあるが，「椅子」は，「ス」の発音が，「鶯」は，「シュ」が多い。

④「す」は語頭よりも語中語尾の方が「シュ」になりやすい。「吸う」は「ス」，「臼」は「シュ」になりやすい。「砂」は「ス」，「茄子」（なすび）は「シュ」になりやすい。

⑤「シュ」は，「主人」も「亭主」も２語とも「ス」となる話者と「シュ」となる話者がおり，語頭と語中語尾の違いはみられない。

⑥中年層では，すでに音韻的対立があり，意識すると混同することは少ないが，話者の内省によると無意識な発音では混同がみられるようである。調査時にも「選手」と「九州」は「ス」となり，「シュ」が「ス」になっている話者がいた。

（３）「ツ」と「チュ」の混同

①高年層では，次の語は音韻的対立がない。

a　通学と中学

b　通学生と中学生

土佐清水市方言の「ツ」は共通語の［tsu］と同じ破擦音から，破裂音［tu］までの幅を持つ。さらに，破擦前舌音「チュ」と混同している。

「通学」「中学」の２語ともに同じ「ツガク」，または「チュガク」となる傾向が強い。

②「躑躅」「包む」「筒」のように「ツ」が連続する語は，「ツツ」または，「チュチュ」となりやすい。

③「チュ」の用例は，「チュー」の用例しかなかったが，多くの場合短母音化され「ツ」または「チュ」となる。

（4）「ズ」と「ジュ」の混同

高年層の「ズ」「ジュ」の子音は摩擦音 / z / であり,「ヅ」「ヂュ」の破裂音 / d / または破擦音 / dz / と区別されることが多い。「ズ」か「ジュ」かはどちらかに一定していない。

①高年層では，次の語は音韻的対立がない。

a　数と果汁

b　人数と忍術

２語ともに「ズ」または「ジュ」となる。「果汁」の語末は短音化することが多く,「数」と同様に「カズ」または「カジュ」となり２語の区別がない。

②「授業・寿命・襦袢・熟し柿」の語は，他の幡多地域では「ジュ」は直音「ジ」となることが多いが，土佐清水市方言では「授業･寿命･熟し柿」は「ズ」,「襦袢」は「ジュ」の発音が優勢であり「ジュ」が直音化した「ジ」にはならない話者が多い。「ズ」と「ジュ」の音韻的対立はない。

③「鈴・涼しい・雀・硯・鈴虫」のように「ス」の直後に「ズ」が続く語は，直音「ス」に合わせて「スズ」か，拗音「シュ」に続き「シュジュ」となることが多く,「スジュ」や「シュズ」となることは少ない。

④若年層には混同は見られない。中年層は個人差があり，若いほどこの現象は無くなっている。

（5）「ヅ」と「ヂュ」の混同

①高年層の「づ」の音は，破裂音 / d / または破擦音 / dz / であり,「ズ」「ジュ」の摩擦音 / z / になることは少ない。「ヅ」は語中語尾では前鼻音を伴う。前鼻音は一拍分の発音「ン」の長さはなく前に添えられる音である。

②高年層の語頭「ぢゅ」の「重箱」は,「ヅ」または「ヂュ」,時には摩擦音「ズ」「ジュ」と発音する話者も多く区別を失っている。語中語尾の「饅頭」も「マンヂュ」「マンヅ」「マンズ」の発音がみられた。語末の長音は短音化される。上記の「ズ」と「ジュ」は破裂音または破擦音の「ヅ」または「ヂュ」の発音がないのとは異なり変化が見られる。

③「綴り方・鼓・続く」のように「ツ」の直後に「ヅ」が続く語は，清音「ツ」に合わせて「ツ゛ヅ」，拗音「チュ」が発音されると「チュ゛ヂュ」なる傾向が強い。

（6）混同のまとめ

次のことが言える。

①すべての現象で音の区別が無く，最初に発話した音が続く傾向がある。語の接続が「鈴」や「鼓」のような清音の後に濁音が続く場合でも直音の後の音は直音が，拗音の後は次も拗音になりやすい。

②「ぢゅ」の語は鼻濁音の伴う破裂音または破擦音の「ヅ」と「ヂュ」に加えて，さらに摩擦音「ズ」「ジュ」の発音も見られ高年層でも区別を失っている。

5．四つ仮名の区別

いわゆる四つ仮名の区別とは,「ジ」と「ヂ」,「ズ」と「ヅ」，及びザ行・ダ行の拗音「ジャ」と「ヂャ」,「ジョ」と「ヂョ」,「ジュ」と「ヂュ」がそれぞれ対立し音韻的区別を有することをさす。

音韻史上，中世のキリシタン資料では「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」は，それぞれ /ji/ /gi/ zu/ /zzu/ と書き分けられており，中央語をはじめ日本全土において保たれていたものが，江戸時代に崩壊がはじまったとされ，現在の共通語が二つ仮名の「ジ」と「ズ」に変化したとされている。土佐清水市を含む幡多方言はこの古い形の四つ仮名の区別のある方言である。

（1）四つ仮名調査語彙

「じ」（語頭）字・自動車・磁石・時間・時代・時勢・自分自身・神社・次郎（名前）・自信（語中語尾）元日・蛆・蛆虫・雉・籤・火事・匙・蜆・習字・知事・富士山・文字・名字・羊・ラジオ・無花果・躑躅

「ぢ」（語頭）痔・地獄・軸・地声・地蔵・持参金・地震・地主・地味・地面・D.D.T（薬）・陣取り・地下・治郎（名前）（語中語尾）舵・筋・縮む・肘・藤・無地・叔父・お爺さん・短い・明治・恥・蛞蝓・紅葉・捻子・鍛冶屋・鯨・味・鰺・宇治茶・弄る・鼻血

「ず」（語頭）狡い・随分・ズボン・誦経・ズロース・ずらす・ずぼら（語中語尾）鈴・涼しい・雀・硯・鼠・数・レンズ・柚・ビーズ・葛・葛餅・見ず知らず・脊髄・鈴虫

「づ」（語頭）頭巾・図画・頭痛・頭陀袋・づっしろ・づつない（語中語尾）大豆・小豆・屑・屑箱・盃・地図・鼓・渦・綴り方・水・石槌山・竹筒・続く・缶詰・福神漬・鬼灯・横綱・崩す・貧しい・削る・清水

「じゃ」（語頭）馬鈴薯・蛇口・砂利・邪魔・邪見・ジャケット（語中語尾）神社・長者・孔雀・大蛇

「じょ」（語頭）上手・漏斗・蒸気・如雨露・助役・徐行（語中語尾）お嬢さん・近所・竜宮城

「じゅ」（語頭）柔道・十五夜・十姉妹・塾・授業・寿命・巡査・十一・十三・十円・襦袢・数珠・十薬・熟柿・十銭（語中語尾）機関銃・三十五・算術・忍術・手術

「ぢゃ」（語頭）ぢゃち（接続詞）（語中語尾）湯飲茶碗・そうぢゃ・できるぢゃいか

「ぢょ」（語頭）錠・定規・丈夫・女優・女学校・除隊・女中さん・除虫菊・除名・除夜・ぢょうく（俚言いつもの）（語中語尾）一丈・解除・男女・手錠・泥鰌・処女

「ぢゅ」（語頭）重傷・重態・住所・住職・住宅・重箱・重役・重視（語中語尾）饅頭・五重塔・居住・心中

（２）四つ仮名区別の実態

調査結果は土佐清水市清水・松尾・布に隣接する四万十市（旧中村市），幡多郡三原村，幡多郡大月町，宿毛市を加え比較しながら述べる。これらは土佐清水市と同時に面接調査によって得たもので，高年層の話者は全て明治か大正の生まれである。四万十市中心地中村４名，下田３名，幡多郡三原村３名，宿毛市宿毛３名，小川４名，山北４名，沖の島母島７名，沖の島弘瀬１４名，幡多郡大月町柏島渡場３名，柏島本島２名を加え一覧表にした。この他，調査した宿毛市鵜来島や愛媛県南宇和郡では，全く区別しないため表に載せていない。表の結果は高年層に限っている。

表は，○は区別有り　×は区別無し　混乱有りの三通りで示す。混乱有りは基本的に区別はあるが，何度目かの発話の中で乱れた話者がいる時に表記している。

①摩擦音「ジ」と破裂音・破擦音「ヂ」の区別

表１　語頭「ジ」と「ヂ」の区別

		「ジ」と「ヂ」字と痔	「ジ」と「ヂ」次郎と治郎	「ジ」と「ヂ」自信と地震
四万十	中村	○	○	○
	下田	○	○	○
幡多郡三原村		○	○	○
宿毛市	宿毛	○	○	○
	小川	○	○	○
	山北	○	○	○
	沖の島母島	混乱有り	×	混乱有り
	沖の島弘瀬	○	○	○
大月	柏島本島	○	○	混乱有り
	柏島渡場	×	×	×
土佐清水	清水	○	○	○
	松尾	○	○	○
	布	○	○	○

土佐清水市では，語頭に立つ語は区別がある。

表２　語中語尾「ジ」と「ヂ」の区別

		「ジ」と「ヂ」火事と舵	「ジ」と「ヂ」富士と藤	「ジ」と「ヂ」蛆と宇治	「ジ」と「ヂ」蜆と縮み
四万十	中村	○	○	○	○
	下田	○	○	○	○
幡多郡三原村		○	○	○	○
宿毛市	宿毛	○	○	○	○
	小川	○	○	○	○
	山北	○	○	○	○
	沖の島母島	混乱有り	×	×	○
	沖の島弘瀬	○	○	○	○
大月	柏島本島	○	○	○	○
	柏島渡場	混乱有り	混乱有り	混乱有り	混乱有り
土佐清水	清水	○	○	混乱有り	○
	松尾	○	○	混乱有り	○
	布	○	○	混乱有り	○

土佐清水市方言では，語中語尾で混乱することがある。他の項目で，清水は「叔父・籤・筋」の３語，松尾で「叔父・籤」の２語，布で「叔父」の１語が摩擦音になり，混乱がある。

②摩擦音「ズ」と破裂音・破擦音「ヅ」の区別

表３　「ズ」と「ヅ」の区別

		「ズ」と「ヅ」狡いと頭痛	「ズ」と「ヅ」葛と屑	「ズ」と「ヅ」見ずと水	「ズ」と「ヅ」涼しいと鼓
四万十	中村	○	○	○	○
	下田	○	○	○	○
幡多郡三原村		○	○	○	○
宿毛市	宿毛	○	○	○	○
	小川	○	○	○	○
	山北	○	○	○	○
	沖の島母島	○	×	×	○
	沖の島弘瀬	○	○	○	○
大月	柏島本島	○	×	○	○
	柏島渡場	○	×	○	○
土佐清水	清水	○	○	○	○
	松尾	○	○	○	○
	布	○	○	○	○

土佐清水市方言では，摩擦音「ズ」と破裂音または破擦音「ヅ」の区別は明瞭であるが，それぞれ直音が拗音化することがあり，音声は「ズ」「ジュ」と「ヅ」「ヂュ」の対立になっている。

③摩擦音「ジャ」と破裂音・破擦音「ヂャ」の区別

表４　「ジャ」と「ヂャ」の区別

		「ジャ」と「ヂャ」 馬鈴薯と ぢゃち（だって）	「ジャ」と「ヂャ」 長者と湯呑茶碗
四万十	中村	混乱有り	○
	下田	混乱有り	混乱有り
幡多郡三原村		○	混乱有り
宿毛市	宿毛	○	○
	小川	○	○
	山北	○	○
	沖の島母島	×	○
	沖の島弘瀬	○	○
大月	柏島本島	×	混乱有り
	柏島渡場	×	混乱有り
土佐清水	清水	混乱有り	混乱有り
	松尾	混乱有り	混乱有り
	布	混乱有り	混乱有り

土佐清水市方言では、日常的には「湯呑茶碗」と言わず「湯呑」または「コップ」を使用するため、混乱有りになっている。俚言形の接続詞「ヂャチ」の使用度が減っているためとも考えられる。

④摩擦音「ジョ」と破裂音・破擦音「ヂョ」の区別

表５　「ジョ」と「ヂョ」の区別

		「ジョ」と「ヂョ」 上手と丈夫	「ジョ」と「ヂョ」 如雨露と女学校	「ジョ」と「ヂョ」 近所と男女
四万十	中村	混乱有り	混乱有り	×
	下田	混乱有り	混乱有り	混乱有り
幡多郡三原村		混乱有り	混乱有り	混乱有り
宿毛市	宿毛	混乱有り	混乱有り	混乱有り
	小川	混乱有り	混乱有り	混乱有り
	山北	混乱有り	混乱有り	混乱有り
	沖の島母島	×	×	×
	沖の島弘瀬	○	混乱有り	混乱有り
大月	柏島本島	混乱有り	混乱有り	×
	柏島渡場	混乱有り	混乱有り	×
土佐清水	清水	混乱有り	混乱有り	×
	松尾	混乱有り	混乱有り	×
	布	混乱有り	混乱有り	混乱有り

土佐清水市方言では,「ジョ」と「ヂョ」の区別がもっとも「混乱有り」が多い。語頭「錠・ぢょうく（いつもの意）・除夜」も語中語尾「手錠・一丈」も「混乱有り」となっている。四つ仮名の区別がはっきりと残る宿毛市沖の島弘瀬でも語によって「混乱有り」となっているため，最も変化の見られる項目の一つと言えよう。

⑤摩擦音「ジュ」と破裂音・破擦音「ヂュ」の区別

表６　「ジュ」と「ヂュ」の区別

		「ジュ」と「ヂュ」 十薬と重役	「ジュ」と「ヂュ」 柔道と重箱	「ジュ」と「ヂュ」 機関銃と饅頭
四万十	中村	×	混乱有り	○
	下田	○	○	○
幡多郡三原村		混乱有り	○	混乱有り
宿毛市	宿毛	○	○	○
	小川	○	○	○
	山北	○	○	○
	沖の島母島	×	×	×
	沖の島弘瀬	○	○	○
大月	柏島本島	×	×	○
	柏島渡場	×	×	×
土佐清水	清水	×	×	×
	松尾	×	×	×
	布	×	×	×

土佐清水市方言では，「ジュ」と「ヂュ」の区別は語頭，語中語尾ともに無い。「ジュ」は直音「ズ」となることもある。「ぢゅ」の音声は「ヂュ」「ヅ」だけでなく「ジュ」「ズ」とも発音される。

⑥４つ仮名区別の比較

土佐清水市方言を含む代表的地点を示す。

表７　代表地点の比較

代表地点	「ジ」 と 「ヂ」	「ズ」 と 「ヅ」	「ジャ」 と 「ヂャ」	「ジョ」 と 「ヂョ」	「ジュ」 と 「ヂュ」
宿毛市 沖の島 弘瀬	区別明瞭	区別明瞭	区別明瞭	一部混乱	区別明瞭
宿毛市 宿毛	区別明瞭	区別明瞭	区別明瞭	一部混乱	区別明瞭
四万十市 中村	区別明瞭	区別明瞭	一部混乱	一部混乱	一部混乱
土佐清水市 清水	語中語尾 一部混乱	区別明瞭 拗音化有り	一部混乱	一部混乱	区別無し 直音化有り
宿毛市 沖の島 母島	一部混乱	一部混乱	一部混乱	一部混乱	区別無し

高知県有人の島は宿毛市沖の島と，鵜来島の二島である。宿毛市沖の島弘瀬は江戸時代土佐領，沖の島母島と鵜来島は伊予領であった。鵜来島は全く区別を持たない方言である。沖の島の島内であっても弘瀬と母島地区の島民はそれぞれ言葉の違いを感じている。一覧からは，四つ仮名の区別は江戸時代に土佐領であった地域に残っていることが分かる。土佐清水市方言は幡多方言の中では，島と同様変化の大きい方言と言えよう。

まとめ

本論文で話者になって頂いた幡多地域の高年層の方々は，全て明治・大正時代生まれである。その多くが学校に行かずそのまま仕事につき，ほとんど土地を離れたことがない。ラジオすら聞くことが無い。共通語を耳にすることはほとんど無かったようだ。土佐清水市は島ではないが当時の交通手段のほとんどは船であり，方言の音韻上特異な変化を生んだと言えよう。

土佐方言における「四つ仮名」の区別消滅の原因を，土居重俊氏は『高知の研究６方言･民俗編』「土佐の方言」(9.10 頁）の中で次の４点挙げている。「①発音は難から易へ移動する。②現代かなづかいの影響。③交通の発達に伴う他県人との交流の影響。④家族構成による影響。土佐人は以前はかなり保守的，閉鎖的傾向が強く，他県人との結婚なども好まぬ気風があった。最近はこの気風が著しく緩和され他県人を親に持つ家庭も増えてきた。」と述べる。

①の「発音は難から易へ」は前鼻音を伴う破裂音または破擦音から，摩擦音の変化は，土佐清水市方言の「ジュ」と「ヂュ」の混同が,「ヂュ」から「ジュ」へもたらされたと考えると当てはまるようだ。しかし, 区別の無い中年層，若年層は共通語と同じ破擦音になっていて共通語化とも言えよう。②③④は，交通の便を考えると土佐清水市方言には当てはまらない。

土佐清水市方言は島のような交通の不便さから, 音韻上，独特の変化をしたと考える。高年層の方言は，次の３点に特徴がある。①音韻交替が多い。②四つ仮名の区別を基本的に音韻上残しながらすでに一部混同も見られる。特に「ジュ」と「ヂュ」の区別は失われている。③「ス」「ツ」「ズ」「ヅ」は直音のほか拗音化した広い範囲で発音され，それぞれ「シュ」「チュ」「ジュ」「ヂュ」が音韻体系上失われていて，他の幡多地域の方言に比べ変化した方言と言える。四つ仮名の区別について，旧中村市（現四万十市）の國學院大學日本文化研究所の大規模調査がある。土佐清水市方言についてもさらに研究を進めたい。

参考文献

１．土井八枝（昭和 10)『土佐の方言』春陽堂

２．宮地美彦（昭和 12)『土佐方言集』富山房

３．土居重俊（昭和 33)『土佐言葉』高知市民図書館

４．土居重俊（昭和 37)『高知ことば読本』高知市民図書館

５．浜田数義（昭和 41)『「幡多方言」の研究』

６．土居重俊（昭和 46)『高知大学教育学部研究報告　１巻 22 号』
「高知県における四つ仮名の区別について－２０年目の追跡調査－」

７．土居重俊（昭和 57)『高知の研究６方言･民俗編』「土佐の方言」清文堂

８．久野マリ子　久野眞　大野眞男　杉村孝夫（1991)『四つ仮名方言の動態と意識－高知県中村市・安芸市の数量調査－』國學院大學日本文化研究所